2018年8月4日　インド大使館　バガヴァッド・ギーター

・読み：第3章36～43節

・引用：第17章20～26節、第2章47節

　おはようございます。

前回は罪を取り除くという目的のために、ヒンズー教聖典の勧めるダーナ(寄付)について説明しました。

聖典がなぜ寄付を勧めるのか、3つのポイントがありましたが覚えていますか？

・相互サポート

・利己的でなくなる

・執着をなくす

の3点でした。

寄付する側とされる側(たとえば家住者と僧侶)が相互にサポートし合う、非利己的になる、執着心をなくす、ためにダーナをするのです。

物や富をどんどんため込んでしまうのは人間生来の性質ですが、一時的なものに対する執着心がある限り神を愛することはできません。

ダーナにもサットワ的、ラジャス的、タマス的の3種類がありますが、これからさらに説明していこうと思います。

その前にダーナの基本的なアイデアについて話しておきます。

・貧しい人に寄付する

・見返りを考えないで行う

・尊敬を持ち謙虚な心で寄付する

これが一般的にダーナと言う場合の3つの原則です。

それでは**サットワ的ダーナ**とは何かについて、第17章20節を見てください。

***適正な時に、適正な場所で、それに価する相手に対し、何の報いも期待せず、ただ自分の義務と心得て行う布施は、サットワの行為である。//17-20***

以前ある人に何かをしてもらったことに対するお返しとして寄付をするのは、「お礼」であってダーナではありません。

この節にアヌパカーリネー(anupakarine)という表現がありますが、「見返りを期待する」という意味のウパカーリネーの否定形で、「**見返りを期待しない**」という意味です。

「お礼」とは逆の見返りを期待しながらの寄付も、サットワ的ダーナではありません。

デーシェー　カーレー　チャ　パーットレー(dese kale ca patre)は、**場所**(デーシェー)、**時間**(カーレー)、**人**(パーットレー)についても考えて寄付すべきだ、と言う意味です。

どの場所に寄付すべきかについて聖典は、巡礼の場所(たとえばベナレス、ブリンダーバン、日本なら四国八十八か所等)や、ガンガーのような神聖な河の河岸、寺院などを挙げています。

時間については吉祥(auspicious)の時間に寄付するよう教えています。

たとえば、日食、月食、新月、満月などは、ヒンズー教では縁起の良い時間とされています。

寄付を与える相手は、ブラーミン、心のきれいな聖典の学者などです。

このように、場所、時、人を考えて行われる寄付はサットワ的ダーナです。

場所、時、人について、別の考え方もあります。

場所については、あるものが不足している場所にその不足しているものを送る、という考え方があります。

ある地方では雨が少なく飲料水が不足しているので、そこに飲料水を送ったというような場合は、*適正な場所*に対する寄付と言えます。

時については、あるものが必要とされている時に、それを送ります。

貧しい人々には毛布がありませんが、それを必要とするのは冬の時期であり、夏ではありません。冬に貧しい人々に毛布を与えるなら、それは*適正な時*に行われる寄付です。

人について言えば、本当に貧しい人は時や場所に関係なく、普通の衣服がありません。

余談ですが、日本人は季節によって着るものを替えます。

1年で3～4回は衣服を替えるでしょうが、最初に見た時には驚きました。

逆に私が散歩していて出逢うペット連れの日本の女性達は、私が一年中同じ服を着ているのに驚きます。理由を尋ねられることもありますが、「私は僧侶だから」と答えます。

貧しく服を持たない人に服を、食事を取れない人に食事を与えるのは、*それに価する相手に対して*行われるダーナです。

協会が寿町で行っているホームレスの方々に対する「ナラ・ナーラーヤナ活動」は、時や場所に関係のない、人に対するダーナの活動です。

見返りを期待して行う非サットワ的ダーナについて、もう少し考えてみます。

これは先ほどの「お礼」のことではありません。

相手から過去に何もしてもらっていないのに、将来の見返りを期待して寄付することです。

たとえば医者に寄付をする場合、心の中では「今後の診察が丁寧になるかもしれない、より良い薬を処方してもらえるかもしれない」という期待があります。

口に出さなくても心の中に見返りに対する期待があれば、ダーナではありません。

また数多く寄付(チャリティ)をすることが功徳を積むことになり、その結果として天国に行けると期待しているなら、それもダーナではありません。

多額の寄付によって、「気前のよい慈善家だ、篤志家だ」などの賞賛や評判、また新聞に名前が載ったりすることを期待するのは名声欲であり、これもサットワ的な寄付ではありません。

過去にサポートしてもらったことに対する「お礼」でもなく、これからサポートしてもらうという見返りも期待しない寄付、さらには今後サポートをもらう可能性すらない人(たとえば貧しい人)に対して行う寄付が、サットワ的な見返りを求めない寄付です。

より深い視点から考えてみましょう。

一般的に人は自分の持っているものの所有者は自分である、と考えます。

私の車、私の家屋、私の衣服、私の富、すべて私が持ち主だと考えます。

もっと素晴らしい霊的な考え方は、

**すべてのものの持ち主は神ただ一人であり、我々はその管理人**(custodian:保管者)**に過ぎない**

です。普通の考え方とは正反対です。

何ひとつ我々のものはありませんし、家族ですら例外ではありません。

なんと深い考え方でしょう。

寄付するということは、私の持ち物ではなく神の所有物を寄付しているのです。

このような態度、見方を実践してください。執着とは正反対の考え方です。

執着の源は、「私のもの」という考え方です。

私のものは何もなくすべては神のものだと考えるなら、寄付する時エゴは全くなくなります。

さらに深い考え方は、**「神のものを神に捧げる」**です。

貧しい人達の中には神がいるのです。

スワミ・ヴィヴェーカーナンダが師のシュリ・ラーマクリシュナから受けた教え、

**人々を神の現われとみなして奉仕する**

(Shiva Jnane Jiva Seva:シヴァ　ギャーネ　ジーヴァ　セヴァ)

は、スワミの思想の根幹をなしています。

『バガヴァッド・ギーター』の講義を聴くだけでなく、これから「すべては神のもので我々に属するものは何もない」、という考え方を実践してみてはどうですか？

これがサットワ的寄付の考え方であり、その結果コネクションがなくなります。

**人と人、人とものの結びつきがなくなります。**

反対にラジャス的寄付ではこの結びつきが強まったり、新しい結びつきが始まったりします。タマス的寄付は幻惑と無知をもたらします。

次に**ラジャス的ダーナ**について、21節を見てください。

***報いを期待したり、将来の見返りを望んでしたり、また惜しみながら出す布施は、ラジャスの行為と言われる。//17-21***

この節では見返りについて、*「報い」*、*「将来の見返り」*という二種類の表現を使っています。

まずは特定の相手をサポートしたことに対し、その相手からのサポートいわば「お返し」として期待する見返りがあります。

ラジャス的な寄付をする人は、この見返り(お返し)がないと怒ります。

もうひとつ、原文のファラム(phalam)という表現が、訳語の*「将来の見返り」*に相当します。

これはファラ(phala)から来ている言葉ですが、phalaは「果実」の意味であり、行為の結果のことです。行為(義務)と結果については『バガヴァッド・ギーター』に何回も出てきます。

第2章47節

*君には定められた義務を行う権利はあるが、その結果についてどうこうする権利はない。君は何らかの結果を求めて行為してはならず、また何もせずという怠惰に陥ってもならぬ。//2-47*

ここにも結果を意味するファーレーシュ(phalesu)という言葉が出てきます。

17章21節に戻りますが、個人相手に期待する見返り(お返し)とは違い、「寄付をした結果として天国に行きたい、寄付をした結果として名声が欲しい」と言う場合、その見返りを与えてくれる特定の相手がいるわけではなく、またすぐに見返りが得られるわけでもありません。

ですから、*「将来の見返り」*という表現になるわけです。

次にパリクリシュタン(pariklistam)は、*「惜しみながら出す」*と訳されています。

たとえば、寄付してはみたもののかなりの出費だったので後になって後悔することはパリクリシュタンであり、心からの寄付ではありません。

「儀式や巡礼では寄付をしなければならない」、と聖典に書かれているので寄付をするのですが、寄付する前にはいろいろ思い悩み、寄付した後には「少し多すぎたか？」と後悔するのがパリクリシュタンであり、ラジャス的寄付です。

そしてラジャス的寄付の結果、束縛や執着が強まります。

相手からの**見返りを期待する、天国に行きたい、名声欲、これらすべて束縛であり執着です。**

**タマス的ダーナ**については、22節を見てください。

***不適当な場所で、不適当な時に、それに価しない相手に対し、しかも相手を尊敬せず無礼な態度でする布施は、タマスの行為と言われる。//17-22***

とても興味深い記述です。

超能力などとは一切関係なく、『バガヴァッド・ギーター』は人間がどんな態度で寄付するかを観察し、それをサットワ的、ラジャス的、タマス的、と分類しているのです。

*「不適当な場所」*(アデーシャ)とは、たとえば非道徳的な人たちが集まっているような場所です。犯罪者などがたむろしているような場所で寄付することです。

*「不適当な時」*(アカーレー)とは、先程の吉祥の時とは反対の縁起が良くない時のことです。

たとえば親族が亡くなった後の喪中に寄付することです。

聖典も服喪期間に寄付することは避けるよう教えています。

*「それに価しない相手」*(アパーットレー)とは、悪い人や非道徳的な人達のことです。

サットワ的な寄付とタマス的な寄付は、すべてにおいて正反対です。

寄付する相手に対する態度についても説明しています。

インドでは寄付をする時、寄付する相手を礼拝し飲み水や足を洗う水をあげる、という伝統があります。

寄付する相手にこのように礼を尽くさないのは、*「相手を尊敬せず」*(アサトクリタム:asatkrtam)ということになります。

また寄付する相手に対し侮蔑的な言葉を投げかけるのは、*「無礼な態度で」*(アヴァギャータン:avajnatam)になります。

これでは寄付をもらう側も気分が良くないはずで、快く受け取るということにはなりません。

次に23～26節を読んでください。

***オーム、タット、サット　―　これらは絶対実在を示す三つの言葉であるが、創造の元始に、ヴェーダ讃歌や供犠の唱和や僧侶の声明は、みなこれによって作られたのだ。//23***

***故に、ヴェーダの聖典を信奉する人々は、聖典の規則に従って供犠や布施や苦行を行う時、必ず初めに聖語の「オーム」を唱えるのだ。//24***

***物質界を解脱して真の自由を願う人々は、物質次元の果報をなんら期待せず供犠や修行や布施を行う時、聖語の「タット」を唱えるのだ。//25***

***聖語「サット」は、実在と至善の意味に用いられ、またお目出度い行為や善行に対しても、「サット」が用いられる。プリター妃の息子(アルジュナ)よ！//26***

寄付だけでなく、儀式や苦行において、我々がそのやり方を間違えてしまうことがあり得ます。

しかしながら、寄付や儀式に先立ってその意味をよく理解した上で、「オーム、タット、サット」と発音するなら、たとえその方法や手順に過ちがあっても、寄付や儀式や苦行の目的を完全に達成することができます。とても興味深い考え方です。

我々はよくこの言葉を唱えますが(たとえば「ハリオーム、タット、サット」)、この言葉はどんな意味で、どこから来ているのか、皆さん覚えていますか？

この3つの言葉の源はどこか、覚えている人はいますか？

**・Ｏｍ iti Brahma**(オーム　イティ　ブラフマ)

　これはトイッティーリヤ・ウパニシャッド(Taittiliya Upanishad)の中の言葉で、オームという音節がブラフマン(絶対の真理)のシンボルであることを意味します。

**・Ｔａｔ- ｔｗａｍ – ａｓｉ**(タットヴァムアシ)

　チャンドーギヤ・ウパニシャッド(Chandogya Upanishad)の中の言葉で、「あなたはそれです」という意味であり、「それ」とはブラフマンのことです。

聖者アルーニは息子のシュヴェータケトゥを別の聖者のもとで学ばせていました。

戻ってきた息子を見て、アルーニは彼の心の中に「自分はすべてを知っている」という自惚れがあるのを感じ取りました。ブラフマンは無限なので、そのすべてを知ることなどできません。

「すべてを理解した」という人がいたとしたら彼の考えは間違っているのであり、本当に聖典を学んだ人なら謙虚であるはずです。自惚れがあるのは、聖典を浅く学んだだけの学者です。

アルーニは息子に、「お前はたくさん勉強したと思うが、あるものを学べばすべてのものの本性について理解できるようなそのあるものとは何か、知っているか？」と尋ねました。

息子は嘘をついたのかも知れませんが、「先生はおそらくそのことについて理解していなかったので、私に教えてくれなかったのだと思います。お父さん、もし知っているなら教えてください」と答えました。

息子に対するアルーニの言葉が、「タットヴァムアシ　シュヴェータケトゥ！」(「あなたがブラフマンなのだ」)でした。

シャンカラチャーリヤの「ジーヴァはアートマン」などと並ぶ、とても有名な霊的等式です。

シャンカラチャーリヤはすべての聖典の結論を、**ブラフマンだけが真理、宇宙は一時的、すべてのジーヴァ(生き物) の本性はブラフマン、体はなくなってもブラフマンはなくならない**、と要約しました。

チャンドーギヤ・ウパニシャッドでも師(父)は弟子(息子)に対して、同じことを教えました。

**・Ｓａｄ‐ｅｖａ‐ｓａｕｍｙａ‐ｉｄａｍａｇｒａ‐ａｓｉｔ**(サデーヴァ　ソウミャ　イダマグラ　アーシット)

これもチャンドーギヤ・ウパニシャッドの中の言葉で、Ｓａｄ→Ｓａｔと考えてください。

「弟子よ！　ただ真理のみが宇宙の創造の前に存在したのだ」という意味です。

(sat:真理 eva:～だけが saumya:弟子 idam;宇宙 agra:以前に asit:存在した)

宇宙が創造される前にはブラフマンのみが存在していて、ブラフマンだけが永遠で宇宙は一時的です。宇宙は現れてはなくなり、また現れてはなくなりますが、宇宙がなくなった後もブラフマンは在り続けます。

よく唱えられる神聖な言葉「オーム、タット、サット」が二つのウパニシャッドに由来することを説明しましたが、このことはよく覚えておいてください。

「オーム、タット、サット」を唱えると、たとえミスがあっても寄付は完璧になります。

ここまででダーナ(寄付)の説明は終わります。

罪を取り除くための次の方法は、ウパヴァーサです。

**ウパヴァーサ**(Upavasa)

　断食のことですが、このウパヴァーサの言葉の成り立ちを知っていますか？

サンスクリット「ウパ」は「近くに」という意味です。

聖典『ウパニシャッド』は「近くに座る」という意味で、グルの近くに座り真理を学ぶことを表します。

同じように「ウパヴァーサ」は「神の近くに留まる」ことを意味します。

断食はウパヴァーサの原義の一部であり、より包括的な意味は「感覚器官を物質的な対象から切り離し、集中して神に向ける」ことです。

断食について皆さんは、儀式に関連して食事を取らないことをイメージすると思います。

イスラム教にもラマダンの伝統があり、約1か月間沈黙して日の出から日没まで食事を取りません。キリスト教ではどうですか？

カトリックでは四旬節という伝統があり、だいたい2月～4月の間食事の量を減らします。

40日間食事を1日2食に減らし、金曜日は肉類を避ける習慣があります。

ヒンズー教では、全く食べない、水だけ、果物だけ、牛乳だけ、などいろいろあります。

ウパヴァーサの目的は、**その期間食事を取らないだけでなく神のことを考える**、ことです。

形だけは断食を守っているがそれが終われば大食いする、というのは聖典の目的とはかけ離れています。

たくさん食べると集中して神のことを考えられないから食事を控える、これが聖典が断食を勧める理由です。

断食と同時に神の名をジャパし、神のことを集中して考え瞑想し、神の讃歌を歌うのです。

現代は儀式として形式的に断食する人が多いのですが、本来の目的を忘れています。

何も食べないのが肉体的に難しい人なら、少しだけ食事して神のことを考えればよいのです。

目的は「神の近くに居る」(神のことを考える)ことです。それがウパヴァーサです。

それに加えて、ウパヴァーサをしている間は嘘をつくなどの非道徳的なことや、昼寝など自分に楽をさせることをしてはいけません。

インドにはシヴァ神の祝祭であるシヴァラトリがあります。

その夜はシヴァに捧げる夜であり、夕方から礼拝があり食事もせず一晩中寝てもいけません。

聖典の中に「一晩中起きていなさい」と書いてあるので、眠りはしないがオールナイトの映画を見ているようでは、聖典の目的からは大きく外れています。

聖典の目的を理解せずに表面的なレベルで断食しても、断食の前後で人は何も変わりません。

脂肪は少し減るかもしれませんが、性格は変わらず霊的な進歩もありません。

皆さんは浅い意味で聖典に従っているだけなのです。

ウパヴァーサの本来の意味を理解して、断食しながら神のことを考えてください。

仏教にも禅宗には断食の伝統がありますし、千日行などでも最後の1週間は不眠不食です。

断食しながら神のことを考えて時間を過ごさなければ、霊的な結果は得られません。

ウパヴァーサの説明はここまでにして、罪を取り除く最後の方法について説明します。

**・ティールタ・ヤットラ**(Tirtｈa Yatra)

　聖地巡礼です。この言葉を聞いたことがありますか？

ティールタ(tirtha)は巡礼の場所であり、ヤットラ(yatra)は「行く」(旅する)という意味です。

ティールタ(聖地)という言葉の由来を説明します。

以前マントラの定義として、「その意味を理解して集中して考えながら繰り返し唱えることにより解脱をもたらしてくれる言葉」と話しました。

Tiryate anena iti(ティーリヤテ　アネーナ　イティ) という言葉がありますが、ティーリヤテは「渡る」という意味です。

何を渡るのかと言えば海を渡るのであり、どんな海かと言えば世俗的な海です。

ですからティーリヤテは「世俗的な海を渡る」こと、つまり解脱を意味します。

マントラがそうであるように、**聖地とはそこを訪れることによって世俗的な傾向がなくなり、我々に解脱をもたらしてくれる場所**のことです。

インドでは巡礼に関する約束事があります。

巡礼に行く前、巡礼の間、巡礼から戻ってきた後、何をすべきかについていろいろ決まりがあり、聖典にもそれについて書かれています。

インドの道徳やヒンズー教の伝統では、巡礼についてのこの規則を守ることが重視されています。インド人がどれほど巡礼に熱心であり、どれほど多くのインド人が巡礼をするか、実際に見てみないと分かりません。

たとえばベナレスやブリンダーバンに、どれほど遠くからたくさんの人々が訪れることか。

経済的な負担も大きいですし、昔は電車やタクシーなどの交通機関もありませんでしたし、道中に多くの危険もありました。

現代はこれらの面では随分変わり、お金があればバスに乗ってあちこち回れるようになりました。四国八十八か所巡りでも実際に歩いて巡礼している人はどれだけいるでしょうか？

しかしながら楽をしていろいろな場所を訪れるのは、観光旅行であって巡礼ではありません。

現代ではほとんどが観光になってしまい、巡礼という考えはなくなりつつあります。

きれいな観光バスに乗って、パワースポットめぐりをします。

昔協会では夏の例会を御岳山で行っていたことがありました。

最初の2～3回は神社の100人も泊まれるような大きな客間が、宿泊者用に準備されていました。

約八年前に訪れた時にはその大きな部屋は取り壊され、小さな部屋に代わっていました。

神社を訪れて宿泊する人の数が激減したからです。

巡礼の習慣がなくなりつつあることの一例です。(高野山などではまだ残っていますが)

短時間でその場所に行き、軽い気持ちで参拝し柏手を打ち、その後は近くの美味しいレストランを探し食事を楽しむ、というスケジュールです。

本当の巡礼のためには準備が必要です。

インドでは貧しい人でも、「死ぬ前に一度でいいからベナレスに行き、ガンガーで沐浴し、シヴァ神に礼拝したい」という希望を持っています。

これらの人達がどれほど篤い信仰心を持っているか、見なければわかりません。

時にはお金がない人達は遠くから歩いてやって来ます。

50～60人ほどの大きなグループで、食材と調理道具を携えて巡礼している人達もいます。

先導者に従って巡礼しているこのような人達を見れば、どれほど遠い田舎からやって来ているか、どれほど貧しいかは一目でわかりますが、同時に彼らの強い信仰心にも驚きます。

彼らにとってはこのたった一度の巡礼が生涯最大の目的なのです。

インドには巡礼の聖地が数多くありますが、巡礼者は神の名を唱え、神の讃歌を歌いながら巡礼します。

「オーム・ナマ・シヴァーヤ　オーム・ナマ・シヴァーヤ　オーム・ナマ・シヴァーヤ　シヴァーヤ　ナモー」、「ハレークリシュナ　ハレークリシュナ　クリシュナ　クリシュナ　ハレー　ハレー」、「ハレーラーマ　ハレーラーマ　ラーマ　ラーマ　ハレー　ハレー」

*(スワミが節をつけて唱える)*

同じ聖地と言われる場所でも、観光で行くのと神聖な目的のために行くのでは、結果は大きく違います。本来の意味を理解して巡礼するなら、神の恩寵で罪を取り除くことができます。

巡礼の場所には4種類あます。

・神に関連した場所

・悪魔に関連した場所

・聖者に関連した場所

・人間に関連した場所

悪魔(アスーラ)と巡礼の取り合わせは奇異に聞こえるかも知れませんが、ここで言うアスーラ(魔族)は罪びとではありません。

アスーラの家系に生まれた人でもプララーダのような聖者はいますし、インドではアスーラを信仰する人も多くいます。

人間に関連した聖地については、ある金持ちの夢枕に神が現れその命令に従い寺を建てたところ、時とともにそこが聖地であるという評価が確立して巡礼者が増えていった、という例を考えると理解できると思います。

聖地それぞれについて巡礼して得られる結果は違い、それについての説明もあります。

もちろんどの聖地についても共通してもたらされる結果もありますが、ある聖地固有の結果もあります。ベナレスでは、ケダルナートでは、というふうに詳しく説明されています。

結果だけでなく、それぞれの聖地での特別な作法もあります。

基本的な巡礼の方法としては、まず自分の家に祀っている神を礼拝し、自分が住む地方の神を礼拝し、目上の人間から巡礼の許可を得たうえで出発します。

道中ではできるだけ神のことを考え、食事を減らし(できるなら菜食)、世俗的な楽しみは避けるようにします。

自分が参拝する神の特徴、歴史、栄光、結果(ご利益)については前もって知っておくことが必要であり、巡礼者に対して神のこれらの特徴について説明することを職業にしている人もいます。それを知ることで、巡礼する意欲も高まります。

参拝する前にその聖地に近い川や池で沐浴します。

ガンガーや、ブリンダーバンの場合はヤムナ川などです。

沐浴してきれいになった体で礼拝し、花や菓子、果物などをお供えします。

インドでは巡礼という場合、それにゆっくり時間をかけなければいけません。

聖地に行ってすぐに帰るのは観光旅行です。

私は今原則的な話をしていますが、巡礼がどういうものであるかは、いくら話を聞いてもビデオを見ても分かりません。実際にインドに行って経験してみなければわかりません。

讃歌を歌い、神の名を唱え、さらに鈴を鳴らすこともあります。

巡礼者によっては1週間ぐらい巡礼の場所に留まる人もいます。

その滞在中毎日することは同じであり、たとえばガンガーで沐浴し神を礼拝します。

貧しい人、司祭、ガイドなどには寄付を上げなければいけません。

大切なポイントは、**観光と巡礼とは違う**ということです。

同じ場所に巡礼しても巡礼する態度によって、その結果は違います。

罪を取り除くために巡礼しているのに、新しい罪を犯してしまう可能性があります。